

梅雨の晴れ間

安永隆俊

たつぷり墨を含んだ雲が南西から北へと流れて、地上に荒々しい文字を書きながら過ぎていった。田植えが終わり、緑の嵩が増した畦道の後方から西の丘陵にかけて、冷たく濡れた竹藪はゆるるばかりで音もたてない。やがて灰色の空が低く流れ、雲に深い青の裂け目が入ると、そこから金色の粉が落ちてくるようで、私はそのかすかな明るみが見えるように古い眼鏡のくもりをぬぐい取り、湿ったガラスの窓を開け放った。木の葉の匂いに小鳥の声が混じり合って飛び込んでくる。濡れて疲れた生き物たちは光の訪れを待ち焦がれていた。梅雨に入ってもう四週間が過ぎている。いま聞こえたのは遠ざかる雷鳴だろうか。澄んだ風が吹いていくと、東方へ連なる四国山脈をいつもより間近に感じる。すると足元に仕掛けていた花火が弾けたように、私は急に外に出てみたくなった。

四か月前に定年退職してから、脱力するような日々の流れの中で、この季節まで殆んど家に閉じこもってばかりだった。梅雨がさらに風通しを悪くした。妻も次女も仕事に出て、昼間の誰も働いていない家の中は、私にとって湿った洞窟のようでもあった。孫の笑顔でも見ようとガレージに出てから気付いた。そういえば長女は子供達を連れて外出すると言っていた。友達の部屋に幼い子供ばかり八人も集うと、弾け飛ぶ小さなエネルギーの爆発で梅雨空も吹き飛んでしまうのだろう。長女のマンションを訪ねるのは諦めたが、車に乗り込むと、やり場がなく持て余すような息づかいが、そのままため息になった。ハンドルに両手を預けていると、こぶしで自分の頭を小突きたくなる。近ごろ精神にまでカビが生え、ほころびかけている。脳細胞のしこりをほぐしたい。空の端に明るみが増してくると草が香るようにまぶしく、濡れた地面には小さな光の点々が散っていた。久しぶりの晴れ間だ。どこでもいい、気を紛らせに行

こう。

東に向かう。国道十一号線が桜三里の登りにさしかかる手前から右に入ると、その先の森の奥から、霧の湧く濃い緑の山塊が現れた。このあたりを走るのは十年ぶりだろうか。久しぶりにあの山並みの深い影に入ってみたい。四本の大楠が並んだ小学校の庭も、古い寺の紫陽花に埋もれた石垣も、段々畑に添って落ちる水路も、全て見おぼえがある。ただあの頃の自分から何かを失っただけだ。何かとは、未来と希望と輝きである。エンジンの振動を受け止めながら、風景をかき分けて進む遠い記憶を、飛び去る小石のように後方に感じていると、この先の滝口を過ぎたあたりに、そういえば不思議な雰囲気の小屋があったのを思い出した。崖の中腹にごつごつとした大木があつて、その前に張り出す石垣の上に、舞台のように佇んだ茅葺きの小屋だった。あの小屋は今でもまだあるだろうか。

山道に入りまばらな人家の間を抜けて、登りが緩やかになってから曲がった。坂のすぐ外に苔だらけの石灯籠があつた。岩の継ぎ目からシダが垂れている。この大きな石の穴に油の皿が置かれて、火がともされた時代もあつたのだろう。さびしい山村にも、年に一度か二度は賑わう日があつて、祭りの着物で飾った子供たちの走り去る後姿や、向かいの谷まで響く笑い声があつたことだろう。

やがて両側に紫陽花があふれてこぼれるような石階段と、十メートルもある高い石垣が見えてくると、その上から茅葺きの急勾配の屋根が覗いた。手前の空き地に車を止めて、反対側の空を見上げた。雲間の三分の一ほどに青味を帯びた空があつたが、いまこのあたりに日射しは届いていない。紫陽花の赤や青や真白の間をぬって石階段を登った。その上も紫陽花が夢幻のように変化して広がり、茅葺きの小屋はその真ん中にあつた。後方には老いたウラジロカシが枝を張り巡らし、濃い緑の影をつくっていた。この小屋は遠くから見たことがあつただけで、どういう建物なのかまだ知らなかつたが、三方を開け放った開放的な空間は、見ず知らずのものが突然訪れることも受け入れてくれそうだった。

小屋というよりはお堂なのかもしれない。北側が床の間になっているが飾りはなく、花の一輪も生けられていなかった。板の間は四畳半より広めのように、四隅の太い柱が軒の深い屋根を支えていた。周囲には縁台が一段低く張つてある。床の間に一礼をして、私は開け放たれた登り口から板の間に上がらせてもらうことにした。座りこん

で遠くを見ると、森のところどころから霧が湧いていたが、その途切れたところに、さつき走った道が緑の傾斜の中を途切れながら続いていた。風通しも良くて、ここで誰かと話すなら穏やかな口ぶりになって、口論にはならないだろう。ここは村の寄り合いの場所なのかもしれない。柱を見ると古いだけでなくかなり頑丈だとわかる。天井は漆塗りの棧の間に桁目の板を格子に組んである。開けっ放しの家屋なのに欄干があつて、森の動物らしい透かしが彫られていた。敷居には六本も溝があるから、季節によつては雨戸や障子をはめ込むこともできるのだろう。細部まで丁寧な作りだ。どういふいわれの建物だろう。

梅雨の晴れ間のさわやかさを肌を感じていると、一服したくなつてきた。缶コーヒ―が車に残つていたことを思い出した。石階段を降りて駐車場までくると、畦道から一輪車を押した作業着の老人が出てきた。ごま塩の坊主頭に無精ひげも半分白い。泥まみれの長靴が鈍い音をひきずつっていた。

「こんにちは」

「ああこんにちは。日和になりましたな。畑はじゆるじゆるじゃけど、お日さんに誘われて、体がむずむずと、働きとうなる」

「梅雨時の畑仕事は大変ですね」

「百姓はいつでも大変じゃ。梅雨は、土は粘るがまだ柔らかこうて楽なほうでの。あんな、ごんごろさんに休みに来たんか？」

「ごんごろさんというのは、上の茅葺きの小屋のことですか？」

「ああ、昔はごんごろ堂ゆうてのう。それはどういう意味ですかと聞かれても、わからもよう答えん。ずっと昔からごんごろさんじゃ。ここでは石垣が一番古うて、出来た時のままらしい。お堂は何度も傾いたので、九十年ほど前、親父らの代に建て替えた」

「私は松山から来ました。海田かいだと言います。さつき勝手にお堂に上がらせてもらいました」

「遠くから茅葺き屋根を見て、ごんごろさんを覗きとうなる人が多いが、別にかまわんで。どうぞお上がり。昔から、そういうことになつとるから。お堂でお休み、ゆっくりおしな」

どこかひょうきんな声で、老人はキュウリやトマトやトウモロコシを山盛りにした一輪車を押して去った。「ごんごろさんか」とつぶやきながら、私は再び紫陽花の間

を登った。奇妙な語感だと思ったが、堂を覆う茅葺きの、軽やかに見えても厚い重みには、あるいはふさわしい響きかもしれない。

望んでいなくても、人生に一区切りつけなくてはならない時がくる。その境界に踏み込むと、もう後戻りはできない。それまでと質の異なった別の人生。そうやって過去と別れ、新しい人生を受け入れなくてはならない。多くを失うことも認めなくてはならない。そんなことはこれまでも何度でもあったはずだが、たいていは自分を胡麻化してきた。過去は隠されているだけでまだ続いているかのように、それとも終わった過去のことを終わったと思いつみ過ぎないように。

仕事を離れてすることが無くなると、余計なことばかり考えている自分がいる。特にやっかいなのは過去を思い出して腹をたてることだ。やがてそれは小学校や中学校の記憶までさかのぼりはじめる。子供時代だって理不尽なことはいくらでもあった。誤解されたり、濡れ衣を着せられたり、だまされたり、人の心の奥底の狡さや陰湿な感情を覗いたり、当時は見えなかったが、今ごろになってわかる大人の本心など。良い先生にも出会えたけど、矛盾した教師もいた。卒業してからわかった。良かったことより悪かったことばかり思い出して怒りはじめる。底なしのマイナス思考が暴れ狂う。冷静になって考えれば自分だって至らぬことばかりだったのに、それは問わないで、過去の人々の仕打ちを怒る。全ては「現実」の迷いからいま抜け出せないから、はじまっているのだとしても。

いつか「現実を受け入れる」時がくるのかもしれない。しかし本当は「これは現実ではない。もっと別の現実があるはずだ」と、じたばたしている。あるはずの新しい現実がどこにもみつからないから、なおさらじたばたする。缶コーヒーを握ってごんごんさんに座り込んでいると、そうか、いま、じたばたのど真ん中にいた、と思いつた。

そこで思考を一旦停止して周囲を見渡す。柔らかい日が射ってきて、紫陽花の垣を明るく照らした。いまこの花に取り囲まれている。その向こうには緑の傾斜が広がる。山が重なり沢の音が聞こえる。大地はうねり彼方に広がる。いまこの位置からは見えないけれど、この屋根の上にウラジロカシの枝が細い尖った葉をつけて、白い葉裏を見せながら風にたわむれていることだろう。こんなときに、怒りにまみれているのは、変じゃないか。自分自身をさいなむだけじゃないか。出来ることなら気持ちを切り替

えたい。誰もが死に向かつて歩いていく。ひとつひとつ失い、最後に全てを失ってしまう。人生の幕を閉じる方向に進んでいくにしても、ここにもっと別の考え方を入れられないものか。これとはまったく違う考え方。するとその時、紫陽花の青色が揺れて、その背後に赤と白が滲んだ。石段を踏む甲高い足音と、人の声が上がってくる。登ってきたのは、さっきのごま塩頭の老人だった。長靴をゴム草履に履き替えている。後ろから同じ年輩ぐらいの人が二人出てきて、急に騒がしくなった。一人は完全に禿げあがった丸顔の老人でオレンジのポロシャツを着けていた。もう一人は全体が浅黒く細長い老人で丸メガネに武道着のような紺色の袴を着けていた。私を見てごま塩の老人が大きな声で言った。

「松ちゃん。この人じゃ。海田さんと言う。松山から来たんじゃない」と
すると松ちゃんと呼ばれたポロシャツの老人は、風呂敷包みを置いた。

「海田さんですな。昼時じゃ、一緒に昼飯にしよう。紹介しとくと、これが吉ちゃんきつで、こちらは敏ちゃんびん。心配せんでええ。あんたはお客さんじゃから、これはお接待じゃ」

すると敏ちゃんと呼ばれた人が低音の響く声で言った。

「たいしたもんじゃないが、さっきみんなで作った。ごんごろさんに来た人への、おもてなしで、わしらに出来ることはこれくらいじゃが」

「はい、でも。見ず知らずの私に……」

少々うろたえていると、三人は隣に座り込んで風呂敷を開き始めた。吉ちゃんと呼ばれた老人の、さっき一輪車に乗せられていた野菜が、きれいに洗われてそこにあった。他の包みからは黄粉をまぶしたお握りと、玉子焼きや串に刺した焼き鳥が出てきた。

「吉ちゃんは百姓で、敏ちゃんは林業と、しいたけや炭も焼いておる。わしは鶏や山羊を飼うとるし、村長もやつとる。村長は若いもんになり手がないので、わしもいまだに引退できん。とはゆうても、小さな村じゃから自分は何にもせず、みんなのご意見聞き係じゃ。それで結構うまくいっとる。それというのも、ご先祖様がごんごろさんを残してくれたおかげじゃ。まあ食べなさいや」

「ありがとうございます。ええと、吉ちゃんと、松ちゃんと、……それから？」

「吉ちゃんは吉郎きちろうで、敏ちゃんは敏造びんぞう。わしは松ノ介まつのすけじゃ。見た通り幼なじみでな」
三人がにこやかに見ているので、私も遠慮を忘れてお握りなどを頂きながら、退職

してから、この小屋を思い出して、ここに来たまでのことを話した。すると吉郎さんは、やっぱりそうだったかという表情をした。

「ごんごろさんが呼んだのかもしれない。海田さんのような人は時々来るよ。一度見ただけの小屋の佇まいが、妙に心に残るようだな。わしらも、これは良いお堂だと思う」

「そうですね。でも、ごんごろさんの名前の由来は分からないのですね」

「表向きはそういうことにしとるが、ほんとうはな、あまりよその人には言えん事情があるんじゃない。もう何百年も前の、悲しい出来事が始まりじゃから」

「そうですか。でもこのお堂は村の人が守り続けてきたから残っているのですね」

「引き継いだものはまた次の世代に伝えねばならんからの。海田さん、いろんな生き方があって、あんたは定年になったそうじゃが、まだ他の人生があるかもしれない」

「そうでしょうか？ それを捜そうとして考え続けているのですけど、みつきりません」

「これまでどんなことを考えてきましたかな？」

三人はいきなり私の迷いの核心に踏み込んできそうだったが、それは決して不快な訳ではなかった。いまこのお堂に座って話しているせいかもしれない。気さくで面白そうな老人だし、思っていることを素直に話してみようという気になった。

「私はあの戦後のベビーブームの、いわゆる団塊の世代で、私だけじゃなくて、いまこの世代が大量退職の時期を迎え始めています。再就職する人もいるし、定年延長もありますので一斉にという訳ではありませんが。ただ五年先か十年先かわかりませんが、遠からずほとんどの人が職を失い、さらに確実に、あらゆる人が老いていきます。

いつでも人は老いていくけど、こんどは数が多い。高齢化社会のはじまりをひしひしと感じています」

「わしらも年寄りじゃから、人ごととは思わんけど、今よりもっと年寄りが増えて、あっち行ってもこっち行っても、どこもかしこも、年寄りさんと年寄りさんがごっつんこ、という社会になるというんじゃないやろう。年金とか高齢者の医療費とか介護の問題とかが年を追って深刻になってくるということじゃ。孫たちがそんな話をしておった。ただその情景が、どうもわたしには想像つかんのじゃが」

「私にも見えている訳ではないのですが。ただ、今のままではいけないので、何かの構造を根本的に変えなくては、いずれにっちもさっちもいかなくなると。しかし、何

をどうするかとなると、わかるはずもなく、いくら考えてもお手上げで、自分のことさえままならないのに、社会の事はもつとままならず、歯を食いしばったり怒ったり、底なしのマイナス思考で、精神が低迷するとうじうじとやりきれず、昔のいやなことを思い出して建設的ではない思考にさいなまれ、やれやれとため息ついては、むしろくしゃ怒り、人を恨み自分を呪い、呆れるほど愚かなこの本性に呆れ果て、じたばたするばかり。こんな状態で、そのくせ孫の顔を見たら、ジージと笑ってくれただけで胸いっぱい幸せになって、食事もおいしくなり、本当は単純な自分だったと、こんな自分をコントロールできないのです」

しゃべってから、つい口が滑って、とりとめもなく愚かしいことを口に出してしまったと後悔したが、三人が静かに頷いてくれたので楽になった。すると吉郎さんが言った。

「ところで、海田さん、あんたビワは好きですか？」

「ビワ？ 果物のビワですか？」

「もちろん。これです。見栄えは良くないが、ひとくち召し上がりなさい」

紙袋から取り出して、ひとくちいいながらも両手に山盛りに乗せて突きだしてきた。別にビワが欲しいとは思わなかったが、受け取るとひんやりとして、小粒の実なのに引き締まって、実際以上に大きく感じた。細かな傷があるので売りものにはならないのだろう。ところが皮を剥こうとすると、内から弾力があって、まるで艶消しの太陽のように鮮やかな色彩が出てきた。ふくらむ香りが手に伝わり、かすかな予感に胸が騒ぐようで、剥き終わるとすぐにかぶりついた。それは重く淀んでいた秘密を、解き放つような甘さだった。かじると謎が解けるように、かすかだけど十分な甘さ。甘さより香りのほうが強い、しかし香りより甘さのほうがやわらかい。私は興奮して、たてつづけに三個食べた。そしてやっと三人が私を見ながら笑っていることに気付いた。

「すみません。おいしくて。これは、なんというビワですか？」

それには答えず、松ノ介さんが言った。

「海田さんは、じたばたしていただけですか？ じたばたしながらも、考えていたことがあったのでしょうか？ そこにも意味があるのでしょう？」

「馬鹿げた空想をしていました。実現不可能の、現実無視の。それでも考えずにはおれなかった。それはあまりにも馬鹿馬鹿しいので、恥ずかしくて誰にも話せません」

すると敏造さんが言った。

「ところで、海田さん、あんたスモモは好きですか？」

「スモモ？ 何故、スモモを？」

そのスモモはおいしいに違いないだろうと思った。しかしそれを食べたら、私は自分の馬鹿げた空想を話さなくてはならなくなると思った。なぜかそんな風に事を運ばれている。つまり、誘導されている、おいしい果物に釣られて自分をさらけ出す姿が見えそうだ。それとも、違うのか？ すると吉郎さんが言った。

「海田さん。これは、ごんごろさんのお接待なんじゃ。心配することはないぞな。同じことはここで何度も繰り返されたことじゃから」

意味はよくわからないけど、決心した。

「実は、スモモは大好きです」

嘘ではなく本当にスモモは好きだった。どんなスモモなのか味わってみて、それから成り行きにまかせよう。このお堂にいると成り行きまで予想外に運ばれる。吉郎さんが渡してくれたスモモは、一見普通と変わらない赤紫色に見えた。ところが皮をかじると歯に沁み込むのは期待以上の芳香で、息が止まるほど濃い果汁だったと、過ぎてから気付いた。

「参りました。これはスモモというより、香りのルビー玉ですね。誰が作ったのですか？」

「早紀さんの作ったスモモじゃ。さっきのピワもな」

「早紀さん？」

「わしら三人の憧れの人じゃった。今でも憧れで、わしらと同じ年とはとても思えん。永遠の憧れの人でな。海田さんもいずれ早紀さんに会うことになるだろうが、その前に、あんたの胸につかえている馬鹿げた空想を、わしらに話してしまっってはどうかね。実現不能の空想であっても、そこにあんたの願いがこもっているかもしれない」

スモモの香りに引き寄せられると、これは確かに成り行きで、正直に話すことにした。

「私は自分の行く末にも迷っているのに、同世代の人のことも心配しているのです。そこからあの空想が出てきたのでしょうか。ちなみに私の同期の者に定年後の計画を聞くと、いろんな答えが返ってきました。ある人は旅行したい、山歩きしたい、日曜大工がいい、山小屋を作りたい、民宿をやりたい。希望を語ってくれました。農業やガ

ーデニング、麻雀三昧でボケ防止、油絵を学びたい、陶芸も面白そうだ、俳句がいい、小説を書いてみよう。まだまだあります。NPOのボランティア活動で社会貢献したい、大学に行つて学び直したい、外国語をやるるか、海外で老後をのんびり過ごそう、気軽なアルバイトはないものか、料理やお菓子づくりを学んで家族を驚かせたい。夢ならいくらでも出てくるのですが、早めに退職した奴に聞いてみると、結局、途中で挫折とか、ほとんどなにもやっていない奴が案外多いのです。どうも自分もその口で、心の底から出てくるものがあるかどうか、正直、なにも見えてこない」

「海田さんは、これまでどんな趣味を？」

「音楽とか読書とか熱帯魚も飼いました。一時期はカメラなども。ただ定年後は従来の延長線上ではなく、新たな展開をと思いはじめまして、それからじたばた迷いだした訳です」

「わしらはごらんの通り、この村で農業や林業や養鶏などをやつとるけん、定年はない。趣味なども盆栽程度で、特別にはなんにもない。それでも忙しくしんどく、賑やかに楽しくやつとる。これは何じゃろう。原始的な生活なんかのう。生活がすべてじゃ。それでも、わしらも息子や孫や甥を見とるけん、海田さんの気持ちがわからんでもないぞ」

私はその誘導路線に乗つかることにした。

「姥捨て山という伝説がありますね。昔、世の中が貧しかった頃、年老いて働けなくなった人たちが、食いぶちを減らすために山に捨てられたという悲しい伝説ですけど、それはインドの説話を元にした言い伝えだとも言われ、しかし日本のところどころに姥捨ての名称が残っているのは、実際にあったことなのかもしれません。捨てられ放置されたのでなく、村人たちの食物の差し入れがあつて、山奥の別天地で老人同士が結構仲良くやつていたという説もあります。人情としてはそちらを信じたい気持ちがあるんですけど、私がいま考えているのは、さっき言いました実現不可能の空想ということになります。姥捨て山という言葉はプラスイメージで考えて、多くの人が姥捨て山に入り、姥捨て共和国という独立国を作つたらどうなるかという空想なのです」

「はーん」と三人は私を見つめた。笑つてはいなかったが、好奇心が表れていた。

「といいますのは、実をいうと原点があつて、井上ひさしさんの、吉里吉里人という小説からの連想に過ぎないのですが」

「題名は聞いたことがあるけど、どんな小説でしたか？」

「日本という国に嫌気がさした東北の寒村、吉里吉里村が、日本からの独立を宣言して、吉里吉里語を駆使しながら、吉里吉里国をつくるため、日本と全世界へのメッセーヂを込めた独立闘争をするという、前代未聞の、抱腹絶倒小説です」

「なるほど、吉里吉里国吉里吉里人、吉里吉里精神の影響を受けたわけですね」

「私の姥捨て共和国は、日本国に嫌気がさしたというよりも、日本国を元気にし、迷惑をかけないために、あえて独立し、爺さん婆さんが自活し、日本国からの若い出稼ぎ希望者がいれば採用もし、同じ敷地の中で共存共栄したものだと、これは実現不可能の空想であると同時に、自分は歳をとつてもひとの世話になりたくない、出来ることは共同体の中で、自分も成長しながら、自力でやりたいという気持ちの表れでもあります」

「それなら、姥捨てという名称を、変えたほうがええなあ。捨てるという言葉捨てて」

「そうですね。どんな名称がいいですか？」

「それは言いだしっぺの、あんたが考えなあ」

「これは空想ですから厳密でなくてもいいですね。突然の思いつきですが、姥捨て共和国の名を破棄して、森の日だまり共和国と呼びましょう。国会議事堂はなくてもいいようだけれど、どうせならいまここで思いついたので、ごんごろ堂ということ」

「ははは、海田さん。それは大変よろしい。空想に名前を与えるということは、少なくともわしらの間では共有できる。それでその共和国とは、そもそもどんな空想の国ですか」

私の想像は漠然としたものだったが、思い出したことを繋ぎ合わせて言葉にしてみた。

「森の日だまり共和国の国籍は取得も離脱も自由です。六十歳を越えたなら共和国に入りたいと思う人は誰でも国籍を取れます。またもつと若い人でも申告すれば国民に登録できるものとします。これは住んでいる人の意識の中の国なので、国土は無いものとしします。国土が無いということは、国名はあつても国境はなく、国外に住んでも、たとえば宇宙ステーションで遊泳中でも、その気さえあれば国民になれるという事です。国民同士が助け合うというのが、憲法の第一条になります。この国は老人主体なので、仕事は激しい労働ではなく老人の生産力に合わせた軽度のものになります。別に働く必要は無いけれど、老いても気楽に働いてみたいと言う人には、その

場があつてもよいと考えています。特徴的なのは勤務時間のこと、従来のように勤務時間に合わせて人が働くのではなくて、人に合わせて自由時間の中で自由に働けば仕事になります。気楽な仕事を自由に働けば仕事になるなんて結構なことじゃが、そんな仕事があるのかい、という疑問が当然出てくるでしょう。ここで、これが私の空想の眼目なのですが、共和国にNPOの、こま切れ集約産業機構というやつを作つてしまえ、という発想なのです。こま切れ集約産業機構とは何か？ つまりなにかやるとして、爺ちゃん婆ちゃんに生産力はあるのか？ というのが出発点ですが、私は老人ホームや身近の人を介護した体験から、生産力のうちでも、楽しい生産力、なら十分あると考えました。そして楽しい生産力に効率的な問題があるなら、それは共和国の通貨で補おうと考えました。国の通貨はペコンとします。これはお腹が減つたときにお腹を叩けば出てくる音で、井上ひさしさんが生きておられたら褒めてもらいたかつたなという程度の、ジョークでもあります。ペコンは国民の相互信頼によつて使われる金で、円とも交換できます。為替レートはゆるやかに、当事者同士の相談で変更することがあります。共和国国民の畑の草むしりを手伝うと五十ペコンほどの働きになったとして、それなら大根一本ほどの交換になるから、あんたその太い奴一本抜いて持つてお帰り、というふうに適用されます。この国の話題は硬軟とりまぜもつとあるのですが、長くなりそうですので、ここらでやめておきます」

無責任な想像ではあつたが三人は楽しそうに聞いてくれた。そして敏造さんが言った。

「どうも海田さんの話を聞いとるとな、その森の日だまり共和国で起きとることというのは、わしらの村でやつとることと、よう似とるな」

「そういえばそうじゃな」 吉郎さんと松ノ介さんが相槌をうった。

「それはどんなところがですか？」

三人には私の質問が聞こえなかつたようで、松ノ介さんが私を振り返つた。

「海田さんは、自分の目の前にある現実を受け入れることが出来ず、じたばたしてると、さつき言われた。それで馬鹿げた空想の世界に逃避してると思い込んでおる。自分には受け入れられない現実。それとはまったく別の考え方はないのだろうか、あんたは答えを探すが見いだせない。あんたの言う別の現実。わしは思うのじゃが、別の現実がありますよ。だが、それを教えるといわれてもできない。なぜなら言葉では言い切れない。感じとるということを、海田さんは、それが過ぎた後で気付くだろ

う」

すると、松ノ介さんが吉郎さんに目配せして、吉郎さんは後ろの風呂敷包みを解いた。長い取手の竹籠が出てきて、そこにナスやトマトやトウモロコシを詰め込んだ。

「海田さん、あんたに、お使いをお願いしたい」

「お使い？ 私は何のお使いを？」

松ノ介さんは立ち上がって、日射しの増してきた森と畑に視線を移した。

「この段々畑の小道を登ると、森の手前に赤い尖がり屋根の家が見えるじゃろう。いっぱいの木が取り囲んでおる。このあたりでは一軒だけの洋館じゃからすぐわかる。あの家にこの野菜を届けて欲しい。それを海田さんに頼みたいんじゃが」

「届けましょう。古そうだけど可愛い家ですね。この村であそこだけ洋館とは、どういう家なのですか？」

「わしらの憧れの人、早紀さんの家じゃ」

その名を聞いて質問に迷ったが、吉郎さんが説明してくれた。

「わしらはみな小学校に上がる前から早紀ちゃんに憧れとって、自分が早紀ちゃんが一番仲良うなりたいと、お互いに競い合う気持ちがあった。ところが三人とも気が合うて、いつも仲が良かったんで、中学生になる頃には三すくみのような状態になった。協定を結んだ訳じゃないが、誰も抜けがけで早紀ちゃんに近づかんようになった。早紀ちゃんも同じ気持ちじゃったろう。四人一緒に遊ぶことはようあったがな。ところが、やがて早紀ちゃんと小学校の新任の教師がばったり出会って、あっさり結婚してしまうた」

「それは、残念なことでしたね」

「そうでもない。初めは悔しかったが、あいつは良い教師じゃった。わしらは仲間になり、あいつもこの土地の人間になった。みんなごんごろさんで酒盛りじゃ」

「どんな気持ちでしたか？」

「早紀ちゃんが幸せになってうれしかったし、安心したよ」

「とても長くて、いい関係なのですね」

「じゃが、早紀ちゃんに隼人君という男の子が生まれて五年たって、ご主人が病気で亡くなった。それからわしら三人は早紀ちゃんを支え、隼人君を助けたよ。早紀ちゃんのほうも頑張って、親が残してくれた果樹を育てておる。品質の管理は名人の早紀ちゃんじゃが、村の人も仕事を助けるようになって順調に進んだ。この村で一番の成

長産業かもしれん。あらゆる果物を作つとる。一年中いつでも、みずみずしい果物を届けてくれる。さっきのビワとスモモでそれがわかったろう。すべてごんごろさんが守ってくれる村じやから成り立ったこと。ではこの籠いっぱい野菜を、早紀さんの家に届けてくれるかのう」

私は籠の取手を握りしめて坂を登った。早紀さんとはどういう人だろうと想像した。三人はその人を憧れと言うけれど、案外普通の人かもしれない。でもあんな果物を作る人は、きっとあの果物のような人だろう。傾斜の間を登っていくと、うねるような道は予想していたより遠かった。この村では一番高い所にあるようだ。赤い屋根が近づいてくると果樹園が見えてきた。木々の間にところどころ白衣のようなものがうごいていた。村の人達が仕事をしている。急いで登りすぎたせいか、汗が噴いて動悸が速くなった。ぶどう畑の隣にすいか畑があつて、細長い温室にあるのはイチゴだろうかメロンだろうか。さらに歩くと赤や紫のスモモの木と、黄色い粒がたわわに揺れるビワの木があつた。その間に立つてこちらを見ている人は、もしかすると早紀さんだろうか。

「いらつしやいませ。お使いですね？」

近づいてきたその人は、金色の横笛のように、ふくらみのある声だった。

「早紀さんですか？ 私は海田というものです。松ノ介さんと、吉さん、敏さんの三人に頼まれてまして、これをお届けに」

野菜籠を差し出すと、早紀さんは両手で受け取った。

「わかっていきますよ。海田さん、どうぞこちらへ」

思っていたより地味で清楚な感じだった。ただ白い風の中に立つ花のような気品があつた。ときどき振り返りながら木の間を進んでいく。やがて眼の前が開け、赤い尖がり屋根の前にでた。石を敷いた半円形の中庭で早紀さんが立ち止まった。

「下の三人にも聞かれたと思いますが、これはお接待ですので、ご遠慮には及びません。お急ぎでなければ、ごゆっくりなさってください。その椅子にどうぞ。飲み物を用意します。コーヒーでも紅茶でも煎茶でも、それとも麦茶？ なにかお好みはおありですか？」

「ではコーヒーを」

「良かった。ちょうど良い豆が手に入っています。少しお待ちくださいね」

早紀さんが家に入ったので、私は中庭を見た。半円の外周に添って丸いテーブルが五つありそれぞれに椅子が四脚ついている。中央のテーブルに向かうと、背景におおきな風景がひろがった。緑の傾斜を縫って道があり、遠くごんごろ堂の屋根はおもちゃのようなだ。霧の湧く山に森と畑と村の家が混じり合っている。それにしても私はなぜお接待を受けているのだろう。このあたりには四国八十八か所のお遍路さんにお茶やお菓子などを出してお接待をする風習がある。接待するほうもそのことに喜びを感じている。昔からの伝統だ。同じことだろうか。私は信仰や魂の救済を求めてきた巡礼ではないのに。ごんごろさんのことは、よその人には言えない事情があると言っていた。お接待を受けながら質問をしてよいだろうか？ 善意を疑い、探りを入れるみたいではないか。するとかすかな息づかいが近づいてきた。

「どうぞおかけください。いい景色でしょう」

いつの間にか早紀さんが後ろに来ていて、テーブルにコーヒートを二つ置いた。早紀さんも向かいに座った。両手の指を重ねて置いてから微笑んだ。

「あなたは何気なくこの景色を御覧になったかもしれませんが、実はこの風景には、到る所に、人の手が入っているのですよ」

意味がよくわからないので考えていると、早紀さんは指先を頬に当てた。

「現代の人が子孫のことを考えるよりも、昔の人が子孫を考える気持ちのほうが、はるかに強かったのではないのでしょうか。ごらん下さい。ここから見える光景はすべて、昔の人達の汗と労働の結果、出来あがってきたものなのです」

「なるほど、元は山や森だったところを、開墾したということですね」

「道と水路、畔と田畑、豊かな土壌を造るまでには、長い時がかかったことでしょう」
目が慣れてきたのか、農園で働いている人の姿が前よりもっとはつきり見えてきた。「貧しい時代の人達は、苦しい生活であればあるほど、子供には自分よりもうちよつと楽をさせてやりたいという願いが強かったのでしょうか？」

「そうですね。私は想像します。日々の労働にへとへとになりながら、歯を食い縛り、力を振り絞って開墾をしたのは、親が子を思う心の延長線上に、遠い子孫の幸せを願うという想いがあった。親から子へと代々その願いを引き継いで、それらが積み重なって出来あがってきたのが、あなたが見ているこの光景なのだと思います」

「それが、昔の人達の夢だったのかもしれないね。」

「昔の人達の最大の幸せは、自分たちは苦難に喘いでいても、後世の人の苦しみをわずかでも減らし、ささやかでも、ともしびに包まれるような、ここに幸せを残せたという喜びだったと思います。それはこの村でも同じことだったでしょう」

そのとき私は、さっきの疑問を思い出していた。ごんごろさんは何をしたのだろうか？ この村にとってどういう人だろう？ そして私は何故お接待を受けているのだろうか？ 私の沈黙を感じたのか、早紀さんのほうからそのことに触れてきた。

「お接待とは、不思議な習慣だと思われませんか？」

私はコーヒーをいただきながら、正直に答えた。

「こんな私が、お接待を受けてよいものだろうかと思っっています。何も知らないままごんごろさんで休憩していたのが縁で、お接待を受けているのかも知れないと思うと、どうもふに落ちません。それとも私の知らない別の理由が隠されているのでしょうか？」

「海田さんは、ごんごろさんのことをお聞きになりましたか？ 何百年も前の悲しい出来事があったので、よその人には言えない事情なのだと」

「はい。ですから興味を持ちながらも、聞きづらかったのです」

「言えない事情というのは、実はごんごろさんというのは、人殺しだったからです」

「え？ そんな人が何故、ここでは大切に思われているのですか？」

「ごんごろさんというのは、古い文書では、岩蔵源五いわくらげんごとも権吾ごんごとも権五郎ごんごろうとも読み解けるのですが、本当の名前はよく分からないのです。人々はごんごろさんと呼んできました」

人殺しという言葉が私を動揺させていたが、早紀さんの声は落ちついていた。

「ごんごろさんの体は人一倍大きく、ものすごい力持ちだったそうです。当時の都のあくどいお役人を諫めるために、村人を連れて役所に行つて、激昂して役人を殺してしまつたそうです。それからごんごろさんは逃げましたが、見た人は誰もが、この人は正しい人だと感じたので、匿いました。追手から逃れて西へ西へと向かい、海を渡り、最後に辿り着いたのがこの土地でした。ごんごろさんは暴れたとき、お役人だけでなく名もない兵士まで殺していました。その人達にも妻や子供があつただろうと、ごんごろさんは悔み、残りの生涯を罪滅ぼしのために生きようと決心したのです。そのようにして、ごんごろさんは村の人達を助け、山と森を開墾し、最後は、自分の命を投げ出して村を救つたという伝説が残されています」

「それは……どのような伝説だったのですか？」

「語り継がれてきた物語が、人々の願望の影だとすれば、過剰なまでに巨大な影は、どれほどまでの願望を秘めていることでしょうか。人から人へと伝えられるうちに、声と声が積み重なって、眼もくらむほどに高鳴っていったのです。一ヶ月も雨が降り続き、山の岩を支えている土がゆるみ、大地が揺れ動き、そして地崩れが村を飲み込もうと、巨大な口を開いたのです。石と砂が混じり合って泥の川になると、土砂は踏みつぶされた大蛇のようにのたうち始め、陰鬱な音が山と谷をきしませたそうです。見張っていたごんごろさんは土砂流の中に飛び出し、位置を見極めて、ものすごい勢いで周囲の土を掻き出しました。そのはるか上に二十丈もの長さの大岩が傾き、岩にはまるで両目が開いたように、行方を決めようと左回りに回転していましたが、視線が定まったのか、頭を下げ、ついに滑り始めました。落ちてくる大岩を見上げたごんごろさんは、掘る手がもう間に合わないかと大岩に飛び付くと、激流と戦いながら、岩を自ら掘った溝へと導き、やがて大岩もろとも大地にめりこんでいったのです。深く暗き土の底。その大岩の、頭を出した上半分が土砂を全部堰きとめて、村は救われたのです。それから大地はそのまま固まり、大岩は村を見降ろす位置に留まりました。その位置こそ、いま海田さんと私が座っているこの場所だったのです。傾斜の上には大きな岩が居座っていると、いつ落ちてくるのかと、村人にとっては不安なこともありました。ところがそれからちょうど百年目の夕方に、村でごんごろさんに感謝するお祭りをしていて、奇妙な音がして、大岩がゆっくり右回りに回転を始めました。人々は驚き、ごんごろさんがまた動きだすからと、安全な場所に避難して動きを見守りました。やがて大岩は傾斜を滑りはじめました。勢いを増して大音響とともに崖に激突して、ついに大岩は砕け散ってしまいました。それがちょうど、いまごんごろ堂がある場所で、そこにある石垣は、あの大岩の砕けた石を積み重ねたものだと言い伝えられています。このように、元はといえば、ごんごろさんが人を殺したところから、この村のすべての伝説が始まったのです」

私はいま見降ろしている深い緑の傾斜を、初めて見る光景のように感じていた。

「ですから、この村のお接待とは、大きな罪から始まる、私達の罪滅ぼしでもあるのです」

「でも、あなたたち村の人は、何も罪を犯していないではないですか」

「私達は生き物を殺して食べます。食べなくては生きていけません。それだけではな

く、生きていくために何らかの罪を犯しています。私達は森を開墾しましたが、それは野生の生き物にとっては生きる場所を奪われることです。自分が豊かに生きる時、そのしわ寄せが見えないところで起きます。どこかで罪滅ぼしをしなくてはならないのです。この村のお接待とは、生きていくこと自体の罪滅ぼしとしての、再生を願うということなのです」

いつの間にか日射しは雲に隠されていた。森からまた霧が湧き、風が怪しく動き始めている。そろそろ帰らなくてはならない。いまは早紀さんのお接待にお返しするとはできないが、感謝だけでも伝えたいと立ち上がった。

「今日はごんごろさんとの不思議な出会いでした。私は定年退職して、これからの生き方を見いだせないまま、あせっていました。今日はそのあせりを忘れていました。自分の気持ちをまだ整理できませんが、それらは必要なあせりだったと、いまは考えられています」

「そうですか、長い間ご苦労様でした。転機を迎えそれを正面から見つめることは勇気のいることですね。これはお堂の三人に届けてください。こちらは海田さんへのおみやげです。果物は季節を繰り返しながら毎年新しい輝きを見せてくれます。あなたもこのビワとスモモのように、あなたをみつけてください」

早紀さんが二つの籠いっぱい果物を渡してくれた。恐縮していると早紀さんが言った。

「ご家族にもたつぷりの香りが届きますように。私も明日は息子に送ることにしましょう。そういえば、息子も来年は定年の歳を数えます。年月がたつのは早いもの」

「息子さんはどちらにいらっしゃるのですか？」

「都会にいますが、忙しすぎて本人はなかなか帰ってきません。ずっとそうなのです。でも、孫やひ孫たちはもぎたての果物をお腹いっぱい食べられるのが楽しみです、よく帰ってきます。季節毎の私の果物は、気持ちをつなげる糸なのです」

「息子さんも、今は忙しくても、定年になれば、何度でも帰れますよ」
すると早紀さんは寂しそうな表情をみせた。

「あの子はいつも忙しくて、いつも遠い所にいるのです。そういえば先日、あの子から手紙が届きました。昔から果物を送ると、どんなに忙しくても、返礼だけはすぐ返ってくるのですよ。わたしの果物にもそんな力があるのかしら」

そして微笑んだ早紀さんはポケットから出した三つの封筒を見せてくれた。いつも

大切に持っているようだった。裏には岩蔵隼人と大きく勢いのよい文字が見えた。そういう隼人という名は老人達から聞いていたことを思い出した。二つの籠を両手に持って、感謝を胸に、私にとって大切な思い出となったこの場所を辞した。老人達が待っているお堂に向かった。

草の間の下り坂を進みながら、なだれうって落ちるような緑の起伏を見渡していると、ごんごろさんの伝説を思い浮かべた。人々の願望の積み重ねから伝説が出来あがったとすれば、虚と実は分離できないほど混ざり合っているのだろう。ごんごろさんが実在した人かどうかも定かではない。それでも、あの赤い尖がり屋根からごんごろ堂のある石垣までの大斜面を見てみると、まるでここを大岩が転げて落ちて砕け散るさまが目に見えてきそうだった。真実は事実と異なる。海が重なつて滝に落ちていくようなこの大斜面を見た人が、伝説の色を染め上げたと思えるほど、ここは古い物語にふさわしい場所と形状をしている。もしかすると、あの三人の老人が早紀さんの家へのお使いを頼んだのは、この景色を私に見せるためだったのだろうか。いまその景色の上に墨を含んだような厚い雲が押し寄せてくる。つかの間の晴れ間だった。もうすぐ降り出す。背中を押す風の圧力を感じた時、ふと思った。伝説はもうひとつの顔を持っている。この大地の成り立ちそのものが伝説で、もつとおおきな物語の一部なのかもしれない。

紫陽花の石階段を登って、ごんごろ堂に戻ると三人が待っていた。板間に果物が入った二つの籠を置くと、そのひとつを私に渡してくれた。

「これは早紀さんから海田さんへのおみやげで、ご家族に。ところでどうじゃ、ええ景色じゃったろう。あれを見せたかった。理屈じゃない。言葉じゃない。伝説は伝説。伝説は言葉の奥にある言葉ではないもの。わしらの生きる風土じゃ。早紀さんの話は聞いたか？」

「品があつて、優しい人でした。コーヒーもおいしかったです。お土産までもらつて、でも、それ以上に、一度にいっぱい未知のものが頭上を過ぎていってしまったようでした」

「ごんごろさんの伝説のことじゃな。わしらはあれが、意味がないこととは思えん。ごんごろさんは大岩と一緒に大地にめりこんでいって、あの時からそのまま土の中におる」

老人たちはこの風土に生きていく精神のことを言っていた。今なら理解できそうだった。

「早紀さんは、皆さんに守られて共に生きていくと感じました。この果物がその結実です。息子さんもお孫さんも、季節毎に果物が届くのを、生きていく一部のように感じているのではないのでしょうか」

「ああ、隼人君も、人助けで忙しくてめったに帰ることはなかったが、遠く離れていても、果物が届くたびに母親の愛情を感じていたのじゃろうな」

「そうですね。隼人さんの手紙も届いていましたよ」

「いや隼人君は十年ほど前に亡くなった。過労死だと聞いている」

「いえ、隼人さんは来年が定年で、手紙は、最近届いたものでした」

吉さんと敏さんが顔を見合わせると、松ノ介さんが言った。

「その手紙は、お孫さんたちが隼人君の名前で書いている。お孫さんは四人いて、隼人君が生きていた頃から、いつも手紙はお孫さんが書き、隼人君と連名で出していた。彼が亡くなってからもその習慣を変えなかったんじゃないやろう。隼人君の宛名で送り、隼人君の名で返ってくる。それはちょうど、ごんごろさんが今でも土の中からわしらを見守ってくれているのと、同じようなことじゃろう」

そういえばあの時、早紀さんが一瞬だけ寂しそうな表情をしたのを思い出していた。

石垣の上に並ぶ紫陽花の葉を、雨の粒が打ち始めた。水飛沫が幕を上げるように影を白くした。老人たちに別れを告げて、私は濡れた石段の音を聞きながら、車に乗り込んだ。狭い室内にビワとスモモの香りが充満した。短い梅雨の晴れ間はいまこの果実のうえに残っている。エンジンが唸ると、激しく雨粒の荒れ狂う西の空に、厚い雲の切れ間が見えた。